

[ディスカッション]

## 言語分析への提言

兎玉徳美

立命館大学(名誉教授)

### 1. 閉塞状況にある言語分析

初めに私の立場を明らかにしておきたい。私は今日の言語分析が主に語彙情報を中心に文内の構造分析にとどまっていると考え、分析対象や分析方法において閉塞状況からいかに脱出すべきか、その方向を探ろうとするものである。

本誌『語用論研究』の最近の月号を見ても、年一度の大会へ招待した講演者は文を超える語用論のあり方を論じているが、会員による研究論文の多くは文脈情報に配慮しながらも、特定の語句を軸に文内の構造分析にとどまっている。これは本誌だけの現象ではない。世界の言語学、あるいは英語・日本語などの個別言語を対象にした今日の言語分析の反映でもある。中国や日本では古くから「文法」と「語法」がしばしば同義に用いられたが、今では世界でも残念ながら grammar が lexical grammar とほぼ同義になっている。

文を最大の分析対象とする傾向は、特に Chomsky (1957) 後の生成文法で強くなっている。生成文法の枠組みはおよそ次の通りである。



矢印は出力・入力関係を示す。レキシコンの語彙情報を入力として統語規則により D 構造から S 構造を導き、あるいは併合 (merge) や移動 (move) などの派生を経て、そこで生成される統語構造を入力として意味や音形が表示される。言語理論により統語部門と意味部門の関係に違いがみられるにしても、「科学」としての生成文法の衝撃は大きく、語彙情報を中心に言語分析を進める手法は多くの言語理論に共通している。

生成文法は人間がなぜ言語を駆使できるのかの謎に迫ろうとしている。私自身、理想的な話し手・聞き手を想定して生得的言語能力を明らかにしようとする生成文法の厳密な文

の定式化にしばしば感服する。しかしこれは言語が有する一部の特質にすぎない。問題は意味分析を統語部門の解釈的なものとみなしたり、分析領域が文内に限られるだけではない。最大の問題は生成文法が明らかにする言語能力 (competence) と実際に話されている言語運用 (performance) との食い違いである。当初、言語能力は言語運用の基礎をなすものとみなされていたが、今日、言語運用の分析では (1) と無縁の枠組みが模索されている。Chomsky は言語学と同じくらい政治について多くの著作を世に出しており、言語分析と政治分析に多くの共通点を認めていると思われるかもしれない。しかし Chomsky 自身、これまで両者の間に直接の関連性を認めていない。これは当然のことかもしれない。Chomsky にとって言語分析が生得的な言語能力を対象とする「科学」であるのに対して、政治分析は生後の経験に由来する多様な価値観や信念体系などとかかわるためである。

言語分析の厳密な定式化が進むにつれて分析対象が狭くなり、皮肉にも、言語分析に人間の姿が見えてこなくなってきた。これは (1)、あるいはそれに類して文内の構造分析にとどまる限り、当然の結果である。言語を駆使できる現象をすべて人間固有の生得的な能力に帰することはできない。人間は生後の経験を通してはじめて人間として思考し行動することができるためである。実際の言語活動は演繹的または帰納的推論や問題解決などに向けて文を重ねたものであり、思考や行動をうながす感情・理性・知見・価値観・社会状況などが文脈情報として言語表現に埋め込まれている。文内の構造分析のみではこのような思考過程や行動を伝える言語表現の内容を理解することはできない。言語分析が言語や言語活動の全体像に迫るためには、文を超える言説 (discourse) をも対象にし、人間の思考や行動をうながす諸要素を分析に取り込むことが不可欠である。こうしてはじめて生得的な言語能力と実際の言語運用のズレを埋めることが可能になる。

## 2. 分析対象と分析方法の拡大に向けて

日本語用論学会が 1998 年に設立されたのも、閉塞状況に向かう言語分析に対抗して、文を超える言語表現を対象に、人間に関与する文脈情報をも取り入れようとするものであった。しかし文脈情報を扱う語用論のあり方が今日一様に確定しているわけではない。大きく次の 2 つに分かれる。

- (2) a. ミクロ語用論：隣接する 2・3 の文を対象に、語の意味・用法が言語運用の文脈の中でどのように変容するか注目し、話し手・聞き手が相互理解する際の共通の条件を明らかにする。
- b. マクロ語用論：言説 (全体) を対象に、言語が人にどのような影響を与えているかについて言語と認知・社会・文化との関係を論じ、話し手の価値観・信念体系などにも注目する。

ミクロ [マクロ] 語用論という用語は語用論のあり方を考察した Verschueren (1999) による。(2a) のミクロ語用論は英米を中心に展開されている。語用論の入門書や概説書である Levinson (1983)、小泉 (1990)、Yule (1996) などがこれに属し、文脈情報にかかわる多様な現象のうち、不思議に共通して直示表現・推意・前提・言語行為などを論じている。本誌11号に見られる Wilson (2009) の関連性理論や12号に見られる Horn (2010) の新グライス派もこれに属する。(2b) のマクロ語用論はヨーロッパ大陸を中心に展開されている。ここでの「言説」という用語は日本語の日常語として定着していないが、英語の *discourse* やフランス語の *discours* と同じく多義的である。実際に使用され、意味上まとまりをなし、文を連ねた言語表現を指す。語りとしての「話、談話、講演」とともに、話し手の主張である「論説、論文」なども含むが、いずれにも社会や文化が反映し明確に区別できないため、一括して「言説」と呼ぶことにする。(2b) には、言説や言説の秩序が人間の知と権力の協働の産物であるとみなす M. Foucault の一連の言説分析や、世の中の不平等・不正などを許している社会構造や社会秩序の批判を目標とする N. Fairclough らの批判的言説分析 (Critical Discourse Analysis) が属する。本誌10号に見られる Verschueren (2008) や12号に見られる Haberland (2010) もこれに属する。マクロ語用論は人間の思考や行動をうながすものを言説の中を探ろうとし、文脈情報を拡大して言説が時代や社会の諸制度・組織・常識・イデオロギーなどによっていかに異なるかを論じている。

2種の語用論は分析対象の範囲が異なり、したがってそこで扱われる文脈情報にも違いがみられる。Wilson (2009) は (2a) を語彙語用論 (lexical pragmatics) と呼んでおり、ここでも語彙情報が分析の出発点にある。それとの対比では (2b) を言説語用論 (discourse pragmatics) と呼ぶこともできる。この広義の言語分析は非言語的な文脈情報を重視し、マクロ語用論だけでなく、社会学・心理学・哲学・文学・人類学・文化論・コミュニケーション論などでも論じられている。マクロ語用論を言語分析から除くとしたら、話し手がかもっとも主張したいことは何であるのか、あるいは時代や社会により言説の秩序がいかに変わるのかなど、分析者としてもっとも魅力ある部分を放棄することになる。Haberland (2010) は (2a) と (2b) が相互補完の関係にあるというが、私は意味論と (2a) (2b) の三者がそれぞれ役割を分担し、相互に補完しているとみる。三者の境界は必ずしも明確でなく、分析の便宜から区分されているにすぎない。言語表現の実態には言語的な文脈情報と非言語的な文脈情報が分かちがたくないまぜの形で埋め込まれており、言語表現の意味はそうした文脈情報を考慮してはじめて決定される。

この世のものはすべて他のものとの関係のもとで成立している。言語表現は人間の生得的な能力と生後の社会文化的経験に由来するとしても、言語記号や人間そのものの制約とともにその特性を捉えたうえで他の要素との関係を探る必要がある。その点、人間の関与しない自然現象と人間の関与する人文社会現象の間には大きな違いがみられる。例えば地震

は日本に起きてもニュージーランドに起きても同じメカニズムが働いている。これに対して戦争は歴史的に繰り返すといわれるが、人間が関与し、戦争はその時どきの条件に応じて生じ、同じ条件で生じるわけではない。自然現象が生じる確率においても、人間が関与し人間世界の多様な条件を考慮する場合、「想定外」の計算まちがいをすることがある。たとえ確率の低い自然現象でも時に連続して起きるためである。自然現象は確率上「想定外」か否かに関係なく、自然のメカニズムに従って生じる。自然科学はこれまで自然現象が生じるメカニズムのデータや観察事実の発見を通じて自然現象に多くの普遍的な法則を見出してきた。法則がいったん確立すると、それに違反する現象が生じない限り、その法則の正しさが身近な科学技術に具現され、再確認されている。これと対照的に、人文社会科学では人文社会現象に対して共通の評価や認識をもつことが困難であり、諸現象をつなぐ法則性や普遍性はほとんど確立していない。核となる原理原則が見出されていないためである。そのため、自然科学と人文社会科学では個別現象を分析する際にも違いが生まれる。自然科学では、複雑系現象はともかく、多くの個別現象の分析結果は自然科学全体の中での位置づけが明確であり、自然現象の説明に貢献する。しかし人文社会科学では人文社会現象をつなぐ普遍的な法則が欠如しているため、個別現象の分析結果は見る視点によって評価が分かれ、パラダイムの立て方によってはいつ廃棄されるかわからない。それだけに個別現象においては常により広い領域の中での位置づけを明確にしておく必要がある。

自然科学と人文社会科学は何の共通点ももたず分断しているかにみえる。しかしいつの時代においても自然科学（技術）の進展は人文社会科学が対象とする社会のあり方や文化に大きな影響を与えてきた。例えば活字印刷術の普及が15・6世紀のルネッサンスや宗教改革を先導し、18世紀に機械や動力を導入した産業革命は工場制度や一般大衆の教育や都市化を促した。20世紀後半から今日まで、われわれは一方で科学技術の成果により日常生活で多くの利便性と快適さを獲得し、もはや文明を過去に引き戻すことができないが、他方では原子力や遺伝子組み替えのように人間の処理能力を超えたものさえ手にしている。現代の科学（技術）はいまだ経験したことのない新しい段階にある。自然科学は何のために真理を追究し、科学技術は何のために開発するのか、そのあり方が改めて問われている。そのあり方は今後の人間のあり方とも密接に関連するだけに、解決の方策は人文社会科学からこそ提起されるべきである。今や新しい時代にふさわしい、自然科学と人文社会科学の新たな結合が求められている。

分析対象としては、言語表現とともにそれを支える文脈情報の領域を拡大する必要がある。同時に分析方法においても、交錯している多様な要素をつなぐ際、全体像との関係で分析の位置づけを明らかにしておくことが求められる。言語分析において例えば社会の不平等や想定外の事態を対象にその矛盾を論ずる場合、その解決は特定の専門家集団にゆだねるのではなく、広く意見を求めるためその実態を白日のもとにさらすよう情報公開すべ

きといえるかもしれない。しかしそれだけで問題は解決しない。万人に納得されるような情報開示を進めるためには、議論は社会の組織・制度などの改革にまで及ぶものでなければならない。このような分析はマクロ語用論が対象とする文脈情報を介してはじめて可能になる。

### 3. 提言

言語分析が今日の閉塞状況から脱出する方策としてこれまでに述べたものを含めて具体的に提案する。

第1に、分析対象としての言語表現は、語・文だけでなく、言説も含むものとする。言語分析はあらゆる言語活動に及ぶことが求められる。2011年前半期にも激論がメディアを賑わした。東日本大震災と東京電力の福島第一原子力発電所事故の「想定外」の事態についての情報開示や風評被害をめぐる記事、あるいは震災や事故の対応に対して菅首相不信任決議やその後の首相選出をめぐる迷走する政治言説などである。メディアは震災復興や原発や政治のあり方を正面から取り上げることはないが、震災対応の混乱や政局については騒々しいほどに踊っている。言語分析としてはこのような報道や言説の(非)妥当性を過不足なく分析できることが望まれる。

第2に、言語表現を支える文脈情報としては言語的情報だけでなく、(2b)で述べた非言語的の情報も含むものとする。そこでは社会の諸制度・組織・常識・イデオロギーなどの評価が求められ、分析者自身の価値観や信念体系も問われてくる。

第3に、分析方法として全体から細部にいたるトップ・ダウン方式と細部から全体に向かうボトム・アップ方式を統合することである。つまり、人間や言語の特性、あるいは人間の言動をうながす価値観などにかかわる一般的な原理から出発して、そこから派生する下部特性を考慮して具体的な言語表現を説明するとともに、具体的な言語表現から出発して一般化を求めていく。両面からの分析が接する領域で齟齬がなくなった段階で言語分析は終了することになる。

第4に、言語が人間のあらゆる営為にかかわるだけに、他の研究領域との協力により、人文社会現象の法則性を示すものとして人文社会科学のモデルになるよう目指すことである。言語分析は言語習得の生得性については脳科学や心理学と、生後の経験との関係では多くの人文社会科学と研究領域を共有しており、本来、人文社会科学のモデルになりうる条件を備えている。

第5に、言語分析が今後言語(活動)の全体像に迫り、言語(活動)の普遍的・一般的な法則を見出すためには、どのような領域の言語を考察するにしても、その位置づけを明確に承知しておく必要がある。二重の意味での位置づけである。1つは当面の分析領域が言語活動全体の中でどこに位置するかの認識であり、あと1つは上記の第2点でみたよう

に言語が社会文化の諸制度・組織・価値観などとも関連するため、そのような非言語的要素を扱う分析として必要な社会意識や世界観を分析者自身どれほど備えているかについての自覚である。

上記の5点は相互に密接な関係にある。言語分析に対する私個人の提案であり、将来に向けての私の夢である。反論やご意見を歓迎します。

#### 参照文献

- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Haberland, H. 2010. "Pragmatics as a Component vs. Pragmatics as a Perspective of Linguistics." 『語用論研究』、12、54-68.
- Horn, L. R. 2010. "Implicature Revisited: Problems and Prospects in Neo-Gricean Pragmatics." 『語用論研究』、12、69-94.
- 小泉 保. 1990. 『言外の言語学——日本語語用論——』東京：三省堂.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Verschueren, J. 1999. *Understanding Pragmatics*. London: Edward Arnold.
- Verschueren, J. 2008. "Context and Structure in a Theory of Pragmatics." 『語用論研究』、10、14-24.
- Wilson, D. 2009. "Parallels and Differences in the Treatment of Metaphor in Relevance Theory and Cognitive Linguistics." 『語用論研究』、11、42-60.
- Yule, G. 1996. *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.